

追悼

永安幸正先生の思い出

立木 教夫

永安幸正先生が亡くなられて早一年、先生は研究と教育に情熱を注がれ、学者としての生き方を、身をもって示されました。先生は、御自分で、「主要研究は、道徳哲学と情報システム理論、それをもとにした経済理論、特に地球環境時代のグローバル・エコノミクス、ビジネス・エシックス」と述べておられますが、モラロジー研究所道徳科学研究センターでは、これらの学問研究を踏まえた上で、特に、「モラロジーの学問的基礎付け」、「モラロジーの現代的展開」、「モラロジーの国際化」に取り組まれ、道徳科学研究センターを廣池千九郎博士の構想に従って、倫理道徳研究の「センター・オヴ・エクセレンス」にしたいという夢をお持ちでした。先生はまた、偉大な教育者でもあり、大学教育を通して多くの若者を育て、また、社会教育を通して多くの人々の人心開発救済を手がけられました。

*

永安先生は私にとって大切な恩人です。ここに先生に引き立てていただいた思い出と、先生と一緒に取り組ませていただいた生命医学倫理の研究を振り返り、私が垣間見ることができた先生の偉大な学問・研究・

教育における一側面を、感謝を込めて書き記しておきたいと思います。

*

私は、一九七六年四月にモラロジー研究所研究部に入れていただきましたが、その直後に、永安先生は私に声をかけてくださいました。「今度書いた論文でエントロピーの議論をやったので、物理の目で見てほしい」ということでした。その論文を預かって、精読した上で、「図に描かれている矢印の流れに、量的関係が保たれていないように思えますが」とコメントさせていただいたことを覚えていています。

永安先生は、自然科学的背景をお持ちであったこともあり、経済経営研究室（現在は社会科学研究室）の窓際のコーナーのところで、よく科学技術を中心とした学際的な話をしてくださいました。当時、私は、モラロジーの勉強を本格的に開始し、あまりにもモラロジーの研究にのめり込んでいたため、先生は、「専門を蔑ろにしないように」とか、「専門を棄ててはいけない」と、折に触れて忠告してくださいましたのです。

永安先生は、単に専門を棄てるなど忠告してくださいただけではありませんでした。あるとき、「立木さんね、今度、早稲田の社会科学研究所（以下、社研と略す）の研究員になつてもらおうから」と、言われました。このとき私は、「先生はああおっしゃってくださいましたが、多分本気ではないだろう」と、まともに受け止めずにいました。すると、しばらくして、当時の研究部長から呼び出しがあり、許可も得ずに早稲田の研究員になろうとしているということと、「首だぞ」と、ひどくしかられたのを覚えています。これは私が永安先生の言葉をまともに受け止めずにいたことによる、失敗でした。このあと、永安先生のお口添えがあったのかもしれない。無事、モラロジー研究所の許可が得られ、また、社研の審査も無事通過して、早稲田大学社会科学研究所の特別研究員にいただけました。

社研では、永安先生をチーフとする研究プロジェクト「社会情報論部会」がスタートしました。先生は、非常な先見の明をお持ちで、来るべき時代の姿を的確に予見しておられました。インターネットや携帯電話が広く普及する何年も前に、情報、コミュニケーション、ネットワークなどをキーワードとしたプロジェクトを立ち上げられたのです。このプロジェクトには、早稲田大学の何人もの教授が学部を越えて参加し、頻繁に研究会が開かれました。私も、発表の機会を与えられ、バイオテクノロジーや生命起源論など生命情報に関する発表を行いました。社研では、『社会科学討究』という紀要を年二回発行しており、部会での発表を論文にする機会が与えられました。

社研にひっぱっていただき、現場の研究者の発表を聞き、また発表の機会も与えていただいたことで、私の科学技術と倫理に関する研究は次第に充実してきました。

一九八六年十二月四日に、永安先生から電話があり、「立木さん、今度、社学（早稲田大学社会科学部）の講義を持ってもらうから、履歴書を書いておいてください」と言っていたいただきました。このときもまた、私は、「多分、本当ではないだろう。早稲田で教えるなんて、そんなうまい話があるわけない」と思い、履歴書を書かずにいました。数日後、研究室に電話がかかってきて、「今、東門にいるから、この前頼んでおいた履歴書を持ってくるように。今日、早稲田で会議があるから提出するので」と言われました。「まだ出ていません」と申し上げると、「すぐに書いて持ってくるように、バス停で待っていますから」とのことでした。すぐに書き始めたものの書き間違えをし、ホワイトが手許になかったので紙を貼って訂正したため、ホコホコの履歴書になってしまいました。随分先生をバス停でお待たせした後、恐縮して手渡したことを覚えています。十二月十二日には、「永安先生より電話、早大での講義決定」と記しています。このとき

も永安先生の言葉は本当でした。先生は、私に、専門を棄てるなどアドヴァイスしてくださっただけでなく、最初は、研究環境に引き入れてくださり、次に、その研究成果をもって学生に講義をする場まで用意してくださったのでした。

早稲田大学社会科学部では、一九八七年四月から一九九九年の三月まで十二年間、お世話になりました。最初の講義は、一九八七年六月二十二日でしたが、初講義を終えて早大南門に向かっていくと、永安先生が門のところまで待っていてくださり、出口正面の高田牧舎でごちそうになりました。帰途、いろいろと御話くださり、またこちらの話も聞いていただいた上に、南柏の駅からは奥様の運転で家まで送っていただきました。このようにして早稲田での講義がはじまりました。ちなみに、一九九一年の資料を見てみますと、講義は「社会科学総合研究O（文化と情報）」という科目で、担当者は「永安幸正、立木教夫、浦山重郎、永安幸正」とあります。四人で分担するところを、永安先生が二人分担当されていたことがわかります。私は、「科学と情報」というテーマで五回講義させていただきました。この年の十二月六日には、「早稲田祭で、学生に人気のある授業の中に入っていましたよ」と教えていただきました。本当に、夢のような機会を与えてくださったことを、今も深く感謝しております。

この早稲田での研究と講義を本にまとめるよう、勧めてくださったのも永安先生です。先生は、週の大半、モラロジー研究所研究部に来ていらっしやいました。いつも大量の書物を大きなばんに入れ、そのかばんを肩からかけて、階段をのっしと上ってこられるのです。お若い頃、駅伝の選手だったこともあり、体力には自信をもっておられたのだと思います。先生は、一九八九年十月に御著書『社会科学のこころ——ゆらぎ文化の知を語る』を出版されました。同年の十二月三日に、「グローバリゼーションと経済倫

理」と題する、モラロジー研究所主催の「アジア経済文化国際会議」を終えたところで、先生は私に向かつて、「さあ次はあなたの本だ」と言って励ましてくれました。

本作りの最初の作業は、これまでに発表してきた論文をコピーして、B4の紙に貼り付け、本のもとになる原稿をつくることでした。この原稿に手を入れていくのですが、先生は、お忙しい中、何回も検討のための時間を割いてくださり、毎日のように執筆の進捗具合を尋ねて下さいました。それまでに発表した論考だけでは、一冊の本としてのバランスがよくないことに気づき、論文を書き足しながら、バランスを整えていきました。一九九〇年十月三十一日に先生は私の研究室にやって来られて、「早急に仕上げること。十一月中旬には本屋にわたせるように」とおっしゃいました。十一月九日に原稿をまとめて先生にお渡ししたところすぐに読んでくださり、内容的なコメントをしてくださった上に、「です、ます」調に書き換えてはどうかご提案くださいました。

出版社探しでは多少苦労しましたが、これも先生のお蔭で、『現代科学のコスモロジー——人間のための物質・生命・情報論』は、成文堂から出版していただけることになりました。このとき本当にほっとしたことを覚えています。私は、一九九二年四月に新設された麗澤大学国際経済学部で、この本を教科書にして、「現代科学思想」という講義を持たせていただけることとなりました。

*

次に、先生と共同で、道徳科学研究センターで着手した生命医学倫理の翻訳と研究について述べておきたいと思います。

一九八三年の第十七回（谷川）研究部ゼミで、「人間生命の問題に対するエシカルなアプローチ——T・

L・ピーチャムの「倫理理論とバイオエシックス」を中心として——という発表を行なったとき、永安先生はすぐに関心を持ってくださり、この研究を続けるよう応援してくださいました。私がこの発表の研究材料として翻訳していたジョージタウン大学ケネディ倫理研究所のトム・L・ピーチャム教授の論文、「Ethical Theory and Bioethics」(Tom L. Beauchamp and LeRoy Walters, ed., *Contemporary Issues in Bioethics*, Wadsworth Publishing Company, Belmont, California, 1982) を丹念に読んでくださり、ここにはジョン・ロールズの議論をはじめ社会科学の議論が豊富に盛り込まれていることもあり、先生自ら翻訳に手を入れてくださることになりました。このとき私は、永安先生と一緒に作業をしながら、先生の英語を読むスピードが速いのに、驚いたことを覚えています。日本語を音読され、次に英語を読んで、全体的な流れの中で訳文を検討し、的確な日本語に確定していく作業を、丁寧にやってくださいました。このような訳文の検討会を一九八六年の四月から七月までに十回以上行ないました。その間も、また、その後も、相当長い期間に互って、先生は、この原稿を携帯されていました。

一九八七年の三月には、「バイオエシックス、出しましょう」と言われ、いよいよこのピーチャム論文の邦訳出版の可能性を探ることになりました。その間にピーチャム先生に手紙を送り、邦訳出版の許可をいただくことにしました。ピーチャム先生からの返事は、「もちろん、出版は許可します。ところで、私たちはこの論文のもとになる本を出版していますが、そちらも訳しませんか」という、新たな提案を含むものでした。その本とは、*Principles of Biomedical Ethics* であり、ちょうどその当時、ピーチャム先生は第三版を準備されているところでした。しかし、今回の論文の翻訳できえ、難しく苦勞したのに、本となったら大変だろうなと思い、これはお断りしようと思った上で、永安先生に手紙の報告をしました。「ピーチャム先

生はこのように *Principles of Biomedical Ethics* の翻訳を提案されていますが、本の方は辞めにしたいと思えます」と申上げたところ、「あなたね、こういうのは引き受けなければいけません」ときっぱりとおっしゃいました。私は、「これは大変だ」と思いましたが、「では、先生、チーフになっていただけますか」とたずねました。先生は、この仕事に大変乗り気で、すぐに人選をし、翻訳チームを結成してくださいました。

われわれは *Principles of Biomedical Ethics* の第三版が一九八九年に出版されたあと、一九九〇年三月三日から翻訳に取りかかりました。これが、苦労のはじまりでした。チームの初訳が出てくると、すぐに、右から左というように、永安先生にお届けしていました。先生は訳文の手直しに着手されるのですが、二、三ページ赤が入ったところで、「全部あなたの訳に直してください」というメモが付せられて、戻ってきました。つまり、一人の頭で、初訳を全部訳し直すことになったのです。私が訳し直したものを永安先生が直され、さらに私が直して先生に戻すというのを何ラウンドか繰り返し、ようやく出版に漕ぎ着けたのは、一九九七年三月三十一日のことでした。七年の時間が経過し、その間に原著は四版が出てしまい、第三版の邦訳出版が不可能になりました。七年の時間が経過し、その間に原著は四版が出てしまい、第三版の出版会と直接交渉してくださった結果、『生命医学倫理』（成文堂）の出版が実現したのでした。

この間に永安先生は、一九九三年頃から体調を崩され、何度も入院を繰り返されました。最初の頃は、休養を兼ねて入院してやるなどとおっしゃっておられました。徐々に病状は深刻になっていきました。しかし、先生の学問研究は、入院で中断されるようなことはありませんでした。先生は、病院に本を持ち込まれ、ベッドの周りに本をたくさん配置して、研究を続けられました。体がたらくても、頭は非常に冴えておられました。第三版の翻訳のときも、森永胃腸科病院に一章ごとに手を入れた訳をお届けすると、次の日に

は電話がかかってきて、訂正は完了し、的確な日本語に改められていました。また、先生は、入院中に病院の医師と生命医学倫理の話をされたり、患者の立場から患者学を構想されたり、さらに、自らの病の体験を踏まえて訳文を練り直し、翻訳に命を吹き込んでいかれました。

はじめに手がけた、「Ethical Theory and Bioethics」の邦訳も、無事、一九九三年に、「倫理理論とバイオエシックス」の(一)と(二)に分け、『麗澤学際ジャーナル』の第一号(一九九三年三月)と第二号(一九九三年九月)に発表することができました。私は、この年の三月に、ワシントンDCにあるジョージタウン大学ケネディ研究所にピーチャム先生を訪問し、『麗澤学際ジャーナル』第一号をお届けしました。ピーチャム先生にお目にかかったのは、このときが最初です。

一九九三年九月に永安先生は、「Principles of Biomedical Ethics」の翻訳が出版されたら、ピーチャム教授を招いて、集中講義をやってもらいましょう。また、いろいろな人に声をかけて、シンポジウムをやりましょう。あなたがコーディネイトしてください」と言われました。この会議は、実際、翻訳出版直後の一九九七年六月二十一日から二十七日にかけて、モラロジー研究所研究部で「ピーチャム教授を迎えるの生命医学倫理国際シンポジウム」と題して開催され、さらにまた、翌一九九八年の十一月四日から七日にかけて、第二回目の国際シンポジウムとして開催されました。いずれも小規模なシンポジウムでしたが、その成果は、トム・L・ピーチャム著、立木教夫・永安幸正監訳『生命医学倫理のフロンティア』(行人社、一九九九年)として出版し、内容の一部は、岐阜大学医学部の入試問題にも採用されました。ピーチャム教授は、二〇〇二年に開催された「モラルサイエンス国際会議」にも参加され「生命倫理とコモンモラリティ」という論文を発表されました(財団法人モラロジー研究所道徳科学研究センター編『グローバル時代のコモンモラリティの探究

——二〇〇二年モラルサイエンス国際会議報告』学校法人廣池学園事業部、二〇〇五年。また、Haruo Kitagawa, Shujiro Mizuno, Peter Luft, *Searching For A Common Morality In The Global Age: The International Conference On Moral Science In 2002*, Lancaster's Books, New Delhi in association with The Institute of Moralogy には原文が収録されている。

これら一連の仕事は、モラロジーの現代化・国際化を目標とした道徳科学研究センターのプロジェクトであり、永安先生が研究センター長をされていたときに実現したものです。生命医学倫理で展開された現代倫理学理論は、『総合人間学モラロジー概論——互敬の世紀をひらく道徳原理』の記述の中に深く浸透しています。

翻訳というのは不思議なもので、第三版であれだけ苦労したのに、また手を出したくなり、ピーチャム先生と相談して、第五版も翻訳させていただくことにしました。永安先生をチーフとして、今度は道徳科学研究センター内で新たなチームを結成しました。今回は、はじめから、初訳ができた後、先生に目を通していただく前に、私が統一的に訳を調整するという前に手がけた手法で仕事を進めていきました。前回同様、今回も時間がかかり、なかなか進みませんが、大学が休みになるとすぐにこの仕事に集中するというやり方で継続し、先生には、全部できたらお目通しをお願いします、と申上げていました。先生は、「体に気をつけてやってくださいよ」と、いつも健康に気を使ってくださいました。ご覧いただけるような段階に仕上がるまえに、先生は他界されてしまいました。いつも、仕事を沢山かかえ、仕事を楽しみながら、学問と研究と教育の本道を歩まれた永安先生でした。先生が、お亡くなりになったあと、私と足立智孝さんの二人で、第五版の監訳を継続し、ようやく二〇〇八年十一月四日に麗澤大学出版会の西脇礼門編集長に原稿をお渡しす

ることができました。平成二十(二〇〇八)年度内の出版が予定されています。この第五版には、「永安幸正先生の霊に捧げる」という言葉を入れて、長年に亙る先生のご指導に対する感謝の気持ちの一端を記させていただきます。よろしくお願いいたします。

*

二〇〇七年八月五日に、永安先生の奥様から電話をいただき、先生が私と話をしたいとおっしゃってくださいました。松戸の新東京病院に出かけました。私が到着すると、すでに土屋武夫先生とご長男の順治さんも来ておられ、先生を囲んで十一時半から十二時半まで、一時間、いろいろな御話をさせていただきました。ベッドの横には先生が精魂込めて執筆されてきた『総合人間学モラロジー概論——互敬の世紀をひらく道徳原理』が一冊、置かれていました。先生はおつらい状態であられたにもかかわらず、言葉は明晰で力があり、『概論』のこと、研究の話、研究センターの将来などいろいろ御話くださいました。このとき、約一ヶ月先に予定されている「研究センターのゼミには、必ず行きますからね」とおっしゃったにもかかわらず、九月三日、突然、麗澤大学国際経済学部の運営委員会の席で、先生の訃報に接しました。四日に先生のお宅にお伺いしてご遺体と面会し、六日に「お別れの会」で御参りさせていただきました。そのまま斎場まで同行しました。三十年間、先生の近くで楽しく研究させていただきましたこと、本当にありがたく、心より感謝しております。先生の学問研究にかけた情熱と生き様を深く心に受け止め、これからも邁進してまいります。先生、まことにありがとうございます。二〇〇九年一月十四日。